

地域を活かす家づくり・まちづくり 災害復興住宅を契機とした地域生業体系の保全

大倉 靖彦 (株式会社 アルセッド建築研究所 代表取締役 副所長)

※本稿は平成 30 年度第 2 回交流セミナー (2019 年 1 月 30 日開催) の講演内容を元に構成されています。

0. はじめに

アルセッド建築研究所の大倉です。

1970 年に事務所を初めて来年でちょうど 50 年になります。最初の頃は、設計をするについては技術がわかってないとまともな設計はできないだろうとシステムズビルディングの開発をやっていました。その後、佐賀の陶磁文化館を設計させていただきました。この建物は地域に馴染むようなもので、かつ、建物は最低 100 年もたなければならぬと、コンクリート躯体に PC 板のカバーを被せて勾配屋根にするという、地域に相応しく、馴染みつつ、長持ちする設計を行いました。それまでは四角い箱のような設計を中心にやっていたのですが、それからは本当に地域に相応しい、地域の気候風土に馴染むような建物を設計していくことにしました。

その後、有田のまちづくり、旧道の整備を手掛けました。街並み整備では、要素技術である木造技術が絶対的に不可欠です。それに取組み始めたら、まちづくり、地域づくりというのは当然地域の活性化に役立つべきで、地域の建築に関係する生業の人たちを、どうやってうまく活用できるか、という考えに至り、そういう方たちと意思の疎通を図って、その地域に相応しい木造住宅を作っていくことを目標に、我々は地域の木造住宅づくりを始めました。全国約 18 か所で、その地域の大工さんたちと、その地域の住宅をどうやって作ったらいいかという活動をずっとしてきました。

HOPE 計画という活動がありますが、我々が HOPE 計画に携わった頃は、中央のコンサルが「地域に相応しいのはこんな住宅ですね」、という提案型で多くはやっていました。我々は地域に事務所を置いていたので、地域の工務店や設計事務所に集まってもらい、どういった家が有田に相応しいか、という議論を始めました。それが我々がやっているワークショップ型で木造住宅を作っていくということの始まりです。そこで、自分たちだけではできないけれど、20 近くの組織が集まればいろいろなことができることを教わりました。

こうしたやり方が、設計者にとっても、工事関係者にとっても、材料供給者にとっても、とても大事だということを学びました。

本日は、震災復興を契機として、山古志村と十津川村で、その地域の人たちと一緒に地域に相応しい住宅とは何だろうか、ということへの対応策を共に考えて、実践してきたことをお話させていただきます。

1. 新潟県山古志村の復興

山古志村がどういうところか、というと、上越・中越・下越とある新潟県の中央で、中越地域にあります。長岡のすぐ横に位置し、人口は 2,200 人弱で 14 の集落があります。山間の集落ですから、隣りの集落に行くまでにとても時間がかかります。

美しい棚田があることで有名なところでもあります。棚田の中に池を作って錦鯉を飼ったりしています。一見すると綺麗な地域ですが、このように棚田になっているところは崖崩れが多い場所なのです。また、とても雪深いところ。冬になると雪に覆われ、風景が一変します。3m ほど積もる雪で、ほとんど建物が見えなくなります。平地で 3m 降るわけですから、どこかにそれが溜まるとすぐに 6m 程度になります。したがってこの地域では、それに見合った家づくりが必要です。

震災前の榎木集落は、とても童話的というかメルヘン的な景観で、どこかのヨーロッパで見たような集落です。それが中越地震で住宅は全て壊れてしまいました。地震災害というよりも地盤災害で、地面が動けば家はひとたまりもありません。10 月に地震が起こってすぐに雪に閉ざされたから、翌年の 5 月に初めて現地に入ることができました。半年間は雪の中に埋もれていたわけです。

中山間地特有の被害があちこちに見られました。倒壊した家屋は、下階がだるま落とし状態に倒壊しています。地震が起こったときには建っていても、3m の雪で押しつぶされて壊れてしまったという家もあります。二次災害ですが、これも地震災害です。山が崩れて河道閉塞したところには自然のダムができてしまい、家を取り残されています。

すべての集落が最低でも半分の全壊率となっています。この地震で山古志村は全村避難したわけです。



長岡市長に呼ばれて「地域の人たちが元気で住み続けられるような家づくりを低コストでできないか」という話から、中山間地の復興住宅検討委員会を発足させて、できるだけ多くの被災者が自力再建できることを目的としました。自力で再建し、また家に、地域に戻るということが地域をなくさないためには一番大事な点です。そのために、安く自力再建できるシステム作りを目標にしました。

大まかにわかりやすくいうと

- ①雪に強い
 - ②山の暮らしに配慮している (周りと密接に付き合いながら生活している)
 - ③約 1 千万円で建てられる
- の 3 つをテーマとしました。

まずイメージスケッチを描きました。復興住宅としての種類の家で考えるのではなく、集落をつくるための多様なエレメントとして考えるべきだろう、とのことで、住宅も多様なタイプが実現できるシステムであるべきだと考えました。



山古志の集落再生イメージ

では、どのような住宅をどのように作ればいいのか、との対応策検討に、山古志村の大工さんに仮設の集会所に集まってもらって、ビール飲みながら放談会を行い、意見交換をしました。この方たちが建てて、この方たちが面倒を見る、それが地域にとって大事な話であるわけです。自分たちの仕事もあってなかなか難しかったのですが、最終的にはこの方たちが面倒を見ることのできる住宅づくりがテーマになります。

山古志が一番多いのは「中門造り」の家です。雪が深いので軒が高く外壁の板張り部分も高い。このように腰の高い外壁の下見板張りや深い庇によって雪や雨から建物を守っています。これは木造の鉄則です。それと雪が落ちない妻入りの玄関、木組の意匠といった家づくりが原則となります。



山古志の美しい風景になじむ住まい



山古志の復興モデル住宅 / テーマは「雪に強く、山の暮らしに配慮し、低コスト」

そこで 2 つのタイプをモデル住宅として提案しました。この地域では雪の処理をしなければならないということが一番の負担です。高床住宅だと、雪処理をせずに車がスムーズに出て行けるわけです。一方、低床タイプの方は雪処理をしないと外に出ていけない。雪国の住まいということで高床タイプも作らないわけにはいかない。そこで基礎の部分を 1 階として 3 階建ての構造計算をすることにしました。

住んでいる方はほとんどが高齢のご夫婦か単身者です。ですから、雪下ろしの要らない落雪屋根の住宅を作らなければいけない、ということで、過去 20 年間の最深積雪量の平均 3m に対応する、屋根の雪処理が一番ローテクでできる「自然落雪屋根」をテーマとしました。

実際の計算で検証すると、5.13 m まで雪が積もることになります。そうすると軒高は 6 m が原則になります。これを大工さんに聞くと、「軒は 20 尺上げておく必要がある」と言いました。軒と雪がつながると、軒先を引きずり下ろす力が働きます。なので軒高 6 m が、地域にとって不可欠だということになりました。

さらに、屋根形状は極力シンプルにする、棟を南北軸にしておけば雪がよく落ちる、2 階まで雪が積もったら 2 階から出られるようにする、あまり大きな開口部は寒くなる、軒の出を確保する (軒が 900mm 程度出ていると、軒から落ちた雪がそれほど壁を押しやらないということも秋田での設計でわかっています)、等の雪とうまく付き合うための様々な工夫も取り入れるようにしました。

家は、間口 4 間、奥行き 4 間、16 坪の 2 階建てで 32 坪のそれほど大きくない家です。その 1/4 を吹き抜けにして、ダイニング・リビングにしています。場合によっては、将来、吹き抜け部分に床を張れるような住戸内増築の為の構造計算にしてあります。

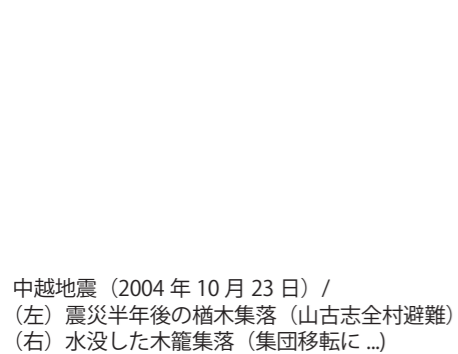
少し狭い家で、どうやって開放感を出すかということで、吹き抜けを設けることにしました。断熱性能を高くし、複層ガラスの二重サッシを使えば、それほど大きな温度差はないということは実際に確認しています。また FF 式暖房の余熱を利用して床暖房をする設備があることも、ここで学びました。

木の存在感、大工技術の継承、建設費の地元への還元といったことを考えて、越後の杉を活用しています。最低 4 寸角以上ですが、必要な大きさであれば材は問わず、地元の一等材を使って太いものを活用して、しっかりつくることを考えています。

大工の技術をきちんと保全しないとリフォームにも対応できないので、木組を現す真壁づくりになりました。我々は住宅をつくる際には、内部は真壁を鉄則としています。それによって大工の腕を廃れさせない、錆びさせないということを考えています。

さらに成長する住まいということで、2 階は間仕切りのない一体空間としています。1 階に寝室とリビング・ダイニングと水回りがありますから、そこでご夫婦や単身の方は基本的な生活はできるようになっています。

間仕切りも建具もない空間の設えで、最小限の規模・仕上げで早く



中越地震 (2004 年 10 月 23 日) / (左) 震災半年後の榎木集落 (山古志全村避難) (右) 水没した木籠集落 (集団移転に ...)





山古志復興モデル住宅（内観）
 ○間仕切り・建具・仕上のない空間
 ○最初は最小限の規模・仕上げで早く安く建てる
 ○復興後の大工仕事も継続
 →「生業の生態系の保全」
 (左) 2階の窓から吹き抜けを介して1階に光を採り入れる
 (上) 最上階には未完成の「空木建て」

安く建てることを狙っています。また復興後の大工の仕事も、維持管理・改修と住戸内増築ということで残しておくことで「生業の生態系を保全したい」ということも含めて考えています。2つのモデル住宅をつくったところに公営住宅もつくりました。各集落への戸建て、公営住宅の建設と学校跡地を活用した竹沢団地で、2戸1長屋と4戸1で平入のバリアフリーの公営住宅をつくりました。2つのモデル住宅は、移住者がしばらくの間、生活し畑仕事をして、可能であれば集落の家を紹介するといった一時宿泊施設として、山の再生機構という団体がその後も活用しています。再建者の方々には、モデル住宅へ来て見学してもらい、設計変更にも対応できることを説明します。地域の設計者と共同でつくりましたから、その設計者がモデルを活用して、それぞれの人たちに対して設計変更を受けて、我々がその後ろ立てや下支えをするという形で進めました。それでいろいろなタイプの家ができました。最低でも3尺増やしたいということで様々な大きさの家もできました。農家民宿を建てた方もいらっしゃいます。我々と地元が全面的に設計支援をしたので、多様な住宅が実現しました。実現した中山間地型復興住宅は、公営住宅と自立再建型の両方を合わせて55戸です。実施にあたっては、再建者（住民）も建設側（大工と長岡建築協同組合）もグループになってもらう。ちょうど長岡と合併したので、長岡建築協同組合もフォローしてくれることになりました。設計側は、我々が基本的な支援をしましたが、チーム・テラという4人のメンバーが地域の人々との設計変更の対応活動をしてくれました。その活動を長岡市がバックアップするという体制をとっています。現在は、ほぼ7割の人が戻られて、山の暮らしに戻りいろいろな活動をなさっています。地域住宅というのは、その地方固有の「方言」だろうと思います。そういう意味で、建築や住まいにも地域性があります。地域の気候風土をどう読み取り、地域の文化にどうなじませていくかということができれば、地域にとって理にかなった建築が実現し、長持ちするし、材料や工法も景観に役立ちます。また大工の技術の活用という意味で、技術を継承していけるし、建設費の地元還元も可能です。木材も同じように地元に戻せますが、地域の森林の保全や育成、林業の活性化につながっていくと考えています。

2. 奈良県十津川村の概要

奈良県の平地（盆地）は北西部の1/5程度で、あとは全部山です。その山のそのまた奥にあるのが十津川村です。十津川村は東京23区より広い面積で、日本一大きな村です。人口は当時4,000（現在3,250）人程度で55の集落があります。周りの山が急峻なため、隣りの集落に行くだけでもとても時間がかかる、という村です。

十津川村はとても雨が地域です。年間降水量は東京の1.5倍ぐらいいで、しょっちゅう雨が降っています。山がとても急峻な場所です。十津川村の集落は等高線に合わせて家を建てます。内原という十津川らしい典型的な集落があります。平側から入って、水回りが入り口付近に、奥に座敷があります。奥の方に新婚の家を増築します。このように等高線に合わせて家がどんどん延びていくという景観になっています。



十津川村の典型的な集落景観（内原）

雨風が下から吹き上がってくるので、ちょっとした低い塀を建てておくと雨風はその上を越えていく、家屋の崖下側に前庭をつくり、その先の低い塀と併せて、家を守りながら生活領域をつくっています。それを構成する石垣や板塀がこの地域の特徴です。崖に張り出して建てる場合には、清水寺の舞台のような崖の斜面の上に高床を作って崖にせり出す建て方「吉野建て」にします。とくに道路と川の間家を建てる場合にはこうなるケースが多いです。このように多様な家の作り方をして、こうした地形の中で住み継いでいくという執念というかエネルギーのようなものを感じます。果無（はてなし）集落には世界遺産「熊野古道」の石畳の道が残っています。それが家の軒先を通して、そこを通るときにちょっとお茶でもお呼ばれするといった、ここを通る人と集落の人のもてなしの場となっている、そんな集落です。十津川村にはとても古くからの歴史があります。南北朝時代からの歴史ある世帯も残っていて、神棚も残っています。中には建武二年（1335年）から住んでいる世帯もあります。仏教がないのでお寺がありません。神道だけです。ご先祖様を祭ったものと神棚しかありません。神道の飾りがとてもきちんとしています。神主さんの家かと思われるような神棚が充実した家もあります。ご多分に漏れず、人口も世帯数もどんどん減少しています。人口は10年間で20%減、高齢化率は43%、65才以上の独居老人は300人超です。言ってみれば日本の過疎・高齢化の最先端です。十津川村の課題としては、
 ①日本一大きな村に55集落が分散しているので、これをどのように面倒を見るか。
 ②急激な人口減少と高齢化により、集落機能の維持が困難になってきている。
 ③山に豊富にある木を活用できていない。山を活性化して地域にお金を下ろせないか。林業の6次産業化による活性化が必要。といったことが問題として明らかになりました。その矢先に、2011年の紀伊半島大水害（台風12号豪雨災害）により大雨が降り、3日間で奈良市の年間降水量分が降りました。その結果、7人が亡くなり、6人の方がいまだに行方不明です。18戸が全壊、30戸が半壊になりました。旧山古志村と同じように地盤災害です。といっても、深層崩壊とい

われている山そのものが崩れるという災害です。対岸の土石流により、十津川が増水し、こちら側に住んでいた方が亡くなるなど、非常に悲惨な状況です。山古志村と同様に、人間の力では何ともならない非常に厳しい状況です。

3. 十津川復興モデル住宅

検討テーマとしては、水害直前から林業の6次産業化を核とした村づくりに取り組み始めたという点を基礎として、
 ○林業振興に寄与する住まい：十津川産材の魅力を存分に活かし、ちゃんと発揮できるような家づくりをする
 ○十津川の気候風土や景観、生活様式に配慮
 それとともに
 ○省エネで快適、高性能、低コストといったコスト・性能面もきちんと担保した住宅を作ろうということ提案しています。モデル住宅の設計条件としては、自立再建住宅のモデル及び、その後公営住宅にも展開していくということから、単身か夫婦二人の55㎡と、家族の80㎡という住宅で、2DK、3DKの住宅としています。建設費もだいたい1000万～1500万円ぐらいを目標にしようとして検討してみました。モデル住宅の検討プロセスとしては、地域を知ること、人を知ること、産業を知ること徹底的に行いました。民家調査として集落の調査も4回（12軒）行っています。どういところでどういう家が建っているのかを調べました。森林組合とは、どうい木材が出るか、どうい品質の木材か、どのようなタイミングで出せるかという打合せを計7回行いました。その材料に合わせた設計をするためです。村づくり委員会というのは、村全体の意思決定の会議で、この期間に4回開催しています。その承認を受けて、計画を実施しました。大工さんには、十津川らしい住まいづくりの話や間取りの話、性能や工法・仕様の話をして6回行い、どの程度のことかできそうか確認をしています。大工さんは省エネのことはよくわかっていないし、真壁は古臭いと思っています。自立循環型も知らない、という状況なので、我々が実現しようとしている性能の住宅を、各部の作り方を含めて理解して建ててもらうためのワークショップと意見交換を兼ねて行いました。住民のグループヒアリングも行いました。青年団と子育て世帯、婦人会と高齢者（老人クラブ）にプランを見せて、そのプランの良し悪しを議論していただきました。大工ワークショップでは、民家調査結果から得られた結果に基づき、こういう家づくりが十津川らしいか、らしくないかを○×で挙げてもらい、どうい家づくりをすれば大工さんたちに十津川らしい家だと納得して、取り組んでもらえるかを検証しました。地元出身の設計関係者にも協力してもらいました。我々は地域に入るときには、その地域の設計者と一緒にやることを原則にしています。最終的には、大工ワークショップや民家調査結果から、「十津川にふさわしい住まいづくり25の手法」という家づくりの所作をまとめました。言葉によって住まいづくりのルールの共有化を図るためです。林業の6次産業化という視点からいうと、十津川の杉・桧をどのように活用していくかという議論が当然必要です。戦後造林なので、ご多分に漏れず樹齢50年（胸囲直径28cm）程度の杉ばかりです。桧も少ない状況です。こうした木材をどうやって活用するか検討しました。森林組合は、天然乾燥+中温乾燥を行っています。木の色・つやの変化の少ない、中温乾燥で含水率20%目標で供給しています。そ

<十津川にふさわしい住まいづくり25の手法>

- 階数は、風を受ける面を少なくするため、平屋建てが基本である。
- 建物の配置（主採光面）は、方位よりも地形が優先される
- 間取りは、少ない平場に沿った奥行3間程度の「横一列型」が基本である
- 建物の背面「きしな」は野菜・漬物の貯蔵、物置、洗濯・物干しの場
- 建物の背面には、開口部を設けず風は妻から妻に抜く
- 接道条件に関わらず、玄関は平入りが原則である
- 玄関から遠いほど部屋の格が上がる
- 縁側は建物内外のつながりや近所づきあいを良くするので大事にしたい
- 神棚は、最も格の高い奥の間（座敷）に設ける
- 先祖の位牌は、中間か奥の間に設ける
- 妻側の浅床で和室の豊かさを演出する
- 屋根は、雨仕舞の良いシンプルな切妻屋根が基本である
- 雨風から建物を守るには、深い軒が必須である
- 雨戸は、台風時のガラスの保護のため必須である
- スパルノフキオロシは、現代では必要性が少なくなっているものの、妻壁の補覆と風景保全に継承する。
- 屋根勾配は、雨仕舞と屋根材の耐久性に配慮して4寸以上確保する
- 屋根材料は、金属葺きが基本である（歴史的に瓦は少数）
- 2階建てとする場合でも、1階には下屋庇を廻して雨から建物を守る
- 外壁は、板壁が基本である（歴史的に土壁は少数）
- 板張りは、縦板張り+目板が基本である
- 湿気から建物を守るために床下換気を十分に確保する
- 4本溝の差し鴨居により建具を開放し大人数の集まりや通風に対応
- 都市部では関東間（1間=1820）も増えてきたが、十津川の家は関西間（1間=1970）が基本である
- 十津川杉4寸以上の柱・梁による骨太の軸組
- 大工の腕が発揮でき、建物が長持ちする真壁造り



いう木材ならば真壁にしても大丈夫です。また間伐材をうまく活用するためには、4寸×7寸を主要な梁材として使う住宅づくりをする必要があります。

柱は4寸角の杉材です。真壁とするには4寸でないと、断熱材を入れてチリが確保できません。外側は軸組の外に透湿防水シートを直接張り、通気層を取って板を張りますが、内側は仕上げを逃がしたいので、チリをある程度確保する必要があります、柱には4寸角が必要になります。

2階建てモデルには、7寸の平角を使った梁を見せています。柱には6寸の大黒柱を使って、骨太に見せるようにしています。

天井と床は板張りとしています。壁は板張りではありません。珪藻土風のクロスです。6面体のうちのどれだけが木材でもいいのか、という話があります。我々は50%と言っています。ですから、天井と床を木で仕上げたら、壁には基本的には板は使わないようにしています。床と腰壁を板張りにした場合には、腰から上は基本的には板はあまり使いません。

十津川材をうまく活用したいということから、十津川の杉を北海道へ持って行き、木の繊維断熱材にしています。また十津川杉の合板も作ってもらっています。さらに、十津川産材を活用した家具を十津川村木工家具協議会で作る、ということを地元は仕掛けています。十津川の総力戦で頑張っています。

性能の話ですが、地方だから、地域住宅だから、性能が悪くてもいいというわけではありませんので、快適で省エネ効果のある住まいづくりのため、自立循環型住宅とCASBEEを活用しました。

①自然エネルギーの活用

②建物外皮の熱遮断

③高効率設備機器

をバランスよく組み合わせることで、年間一次エネルギー消費量を約42%削減することを目標としました。

CASBEEはSランクとして、地域住宅は性能が悪いという風評は出さない住まいづくりを徹底的に行いました。

公営住宅基準と長期優良住宅基準がありますが、一番高いところを達成しています。



十津川村復興モデル住宅
/スバルノフキオロシ、板壁、生垣、板塀、野面石、菜園

まず平屋建てと2階建ての十津川復興モデル住宅をつくりました。2階建てのモデル住宅には下屋を通しました。妻壁保護の十津川流所作のスバルノフキオロシも設けています。板塀も、実際に建てる時に忘れられないようにモデル住宅にも付けています。復興公営住宅でもルール化されたのでよかったと思っています。

平屋建てのモデルは平入りの横長の住宅です。55㎡ですから残念ながらきちんとした縁側などは設けられませんが、濡れ縁を付ける、きしなへ出られる勝手口を作る、浅床を設ける等、できる範囲で地域の住まいづくりを徹底的にやっています。内部は真壁造りで、天井と床が板張りの仕上げになっています。

2階建てのモデルも、基本的には平屋建てと同じ作り方です。2階は基本的には一部吹き抜けとなっています。その部分は将来増築できるようにしています。木造は、この程度の荷重が増えてもそれほど影響はありませんので、将来増築の段取りはしてあります。

4. 復興公営住宅への展開

こうしたモデル住宅をつかったのですが、高齢者が多く自立再建できない人が多いため、復興公営住宅に展開する検討が行われました。まず、村の安全・安心拠点といわれているところが大きな集落の中で北と南にあり、北が谷瀬集落、南が高森集落です。その2つの集落に住んでもらうことで集約することになりました。

それから、大規模な造成を行わず、既存集落の空き地（休耕田畑）に戸建復興公営住宅を埋め込む方法を配置計画チームで考えました。街並みを壊さないように、戸建住宅しかないような地域に、どんと集合住宅を放り込むようなことはしない、地面も大きくいじらない、等の方針で街並み整備型の復興公営住宅をすることになりました。

集落埋め込み型なので、戸建住宅を集落の中に入れていきます。これはとても大事です。建物は地域の木工それぞれが請け負うわけですが、宅地づくりも擁壁が2m以下ということで木工が請け負えます。そういった地元活用のやり方を、



地元の建設技監が知恵を出して工夫しました。結果として地域に非常に馴染むような景観をつくる源になり、かつ地域の人々が全て自分たちの力でできる家づくりとなっています。

谷瀬、高森の復興公営住宅については、板塀を作る予算も組んでもらえました。モデル住宅をつかったときに板塀を組み込んでおいたおかげです。既存の土地を買収し、造成されていた宅地をそのまま活用して建てた復興公営住宅もあります。

山間の村ですから、里道という人が歩く道がたくさんあります。里道と車道がクロスしています。里道を活かすと、村の人たちもそれを使って隣近所に行ったり買い物に行ったりできるので、基本的には、里道はすべて活かしました。

屋根や外壁の色は何種類か用意して、画一的にならないようにしました。

吉野建てタイプのRC造の半地下部分は、色々な物を入れるスペースとして使われています。崖に向かってせり出した木造のバルコニーの構造体は、耐震壁の部分をブレースとすると下部取り合い部が腐ってしまうので、落とし込み板壁として、耐力を確保しつつ耐久性のある設えとしています。谷瀬、高森の復興公営住宅も埋め込み型で構成しています。復興公営住宅で積極的に集落をつくっています。そうしたら、一般住宅でも改修のときに同じような板壁にした家づくりが可能になるような、徹底的なこだわりによる波及効果も期待しています。

崖地側に設けた前庭と低い塀により、風は上を越えさせて、視線は下を通すという十津川らしい状況がわかります。



高森集落に埋め込まれた復興住宅

5. 高森のいえ(福祉住宅)への展開

それをさらに発展させて、助け合い支え合いながら自立生活する村営の住宅をつくることになりました。福祉における未来志向型の住宅をつくろうと、復興モデル住宅・復興公営住宅による新しい集落づくりの延長として、奈良県による強力な財政・人材支援の下、都市計画家の荻原敬先生(十津川村・村づくりアドバイザー)を中心とした検討チームのもとで、新しい集落づくりの視点での議論をしながら進めていきました。緩やかな見守りがあれば自立できるような高齢者が、グループホーム的に助け合い支え合いながら集まって住む。それを見守るために、若い世帯に外から入って来てもらいたい。福祉施設ではなく、要介護2までで、入居者の平均年齢は85歳。老人ホームと住宅の中間の選択肢で、最期まで村に住み続けたい意思を尊重する、といったことが明治大学の園田先生を中心とした企画チームのポイントとなります。

村外の福祉施設に入所すると、その介護保険を村が負担しなければいけない。それを何とかしないとまずい、こうした現状からなんとか住民をつなぎとめ、この福祉住宅に入ってもらおうと考えたわけです。その目標から、今までは雰囲気の違いを住まいづくり、集落づくりが必要になります。不安や寂しさといったものを何とか解消し、さらに地域の活性化につながり、周りの人たちも使えるような地域活性化施設のような建物として位置づけられないかとの考えです。



高森のいえ

住宅の種別は、高齢者向けの単身者住宅、及び二世帯用住宅と、一般向け住宅(子育て世帯用)ですが、この一般向け住宅が見守りを担います。

合言葉は「十津川アーバン」といって、都市的な雰囲気を醸し出すような街路型の集落を創出しています。

建物のつくりは、基本的には復興モデル住宅、復興公営住宅と同じようなつくりになっています。

単身者用の2DKと、二世帯用はもう少し広い2LDKです。今ある家を処分しないで、置いたままこちらに移住できるようにしています。大型家具や大型家電は村費で当初から備え付けたゲストハウスのような住宅としています。トランク一つでここへ来て、しばらく住んで下さい、気に入ったらずっと居て下さい、ということです。そうすることで来やすく、何かあったら帰れるという、来たり帰ったりが可能な「二地域居住」の仕組みにしています。

一般向け住宅棟には、子育て世帯が住むリビングダイニングと共用スペース(共同キッチン)があります。この共用スペース(共同キッチン)が引き籠もり防止など、皆が集う仕掛けの部屋になっています。



高森のいえ(福祉住宅)

ども行えるようになっていきます。地元開業医による出張診療もこのセンター棟で行っています。高森のいえは囲み型の庭をつくり、それを中心として高齢者向け住宅棟、見守りのための一般向け住宅棟、地域活性化施設を配置しています。雨が多く、高齢者が多いことから、すべての建物をつなぐ回廊(雁木)をつくって、雨に濡れずにいろいろなところへ移動できるようにしています。回廊(雁木)でつなぐことで、都市的な雰囲気も漂わせています。中庭には子供たちが遊んだりして、多様な人たちが積極的に活用してくれるような状況になっています。街路型の住宅に灯りが点いていれば、元気でいることがわかります。



家の内部は真壁で、桁高は十津川にふさわしいように低くしています。つくり方は先ほどの復興公営住宅と同じなので、大工さんがすぐに理解してくれたので、とても効率よく建設できました。共用スペース(共同キッチン)がある住まいをつくると、移動販売車の巡回拠点にもなり、そういうことでまた人が集まります。共用スペース(共同キッチン)では、入居者・集落住民・福祉ボランティアによるお茶会やお食事で皆さんが集まります。こうした活動が積極的に行われています。

おかげさまでいろいろな賞を受賞しました。この一連の取組によって国連ハビタットが主催する「地域住宅賞」や2017年には奈良県と十津川村が合同で「アジア都市景観賞」という非常にありがたい賞もいただいています。

今まで紹介しましたように、ともかく地元をどう活かすか、住まいを地元でどう馴染ませるかということに努めています。それが地域の人たちにとって大事だし、木造住宅をつくっていく人たちの生業の体系を保全していくことではないかと思っている一つの事例です。参考にいただければ幸いです。どうもありがとうございました。(終)

大倉 靖彦(おおくら やすひこ)

1947年奈良県生まれ。1970年芝浦工業大学工学部建築学科卒業。同年、RAS建築研究所を経てアルセッド建築研究所設立に参加。現在、代表取締役副所長。1977年より各地でのワークショップによる地域住宅造りの設計や支援の活動中。2000年頃より委員会活動を通じて地域木造住宅づくりの支援を継続中。2008年より長期優良住宅関連業務・伝統的木造住宅設計法検討業務等地域型住宅実現支援活動。2011年より東日本大震災・紀伊半島大水害等の地域住宅による災害復興の支援活動中。2012年より紀伊半島大水害の奈良県十津川村の地域住宅による災害復興の支援活動中。2017年よりCLT建築物の企画段階からの設計支援活動中。

□主な作品

佐賀県立九州陶磁文化館(1980年 佐賀県有田町 1981年建築業協会賞)、明治神宮神楽殿(1993年 東京都渋谷区 1995年建築業協会賞)、宮崎県木材加工技術センター(2001年 宮崎県都市 2002年県木造建築設計コンクール最優秀賞 2006年木の建築賞)、長岡市中山間地型復興住宅検討及びモデル住宅・公営住宅(2005~7年 新潟県長岡市 2007年住宅・木材振興表彰)、十津川村復興公営モデル住宅配置・実施設計及び地域住宅システム開発(2012~)他多数。

